

歴史は女が創る

母
妹
子
白
2

IMFは「女性の活躍が日本経済活性化の決め手」と緊急レポートを出した。

確かに日本の高齢化問題は深刻で、労働力が日ごとに減少しつつある中でも政府は社会福祉を懸命に維持する必要に駆られている。

安倍首相の「女性の活躍が成長戦略の中核」宣言も、的を得ている。

人口の半数以上を占める女性は、高等教育を受けながらもその能力を十分に生かしているとは言い難く、専業主婦として家業に専念したり、パートとして軽作業に甘んじている女性も多いように思う。長い歴史のなかで役割分担が決まり、男性がそれを望み女性は甘んじて受け入れてきたのであろうが、歴史は今変わろうとしている。

長い歴史と言えば、かの天下分け目の関ヶ原も女性が決したとの説がある。

足軽から身を起こした秀吉には子飼いの部下がいない。コンプレックスに苛まれた彼は、地元から有志の少年を集め妻のねねに育てさせる。賤ヶ岳の合戦で名を馳せた加藤清正や福島正則など七本槍の面々は初期家臣団の中核を担うようになっていく。やがて浅井氏滅亡のあと、北近江の主となった秀吉は長浜に築城し、浅井氏の残党を多く召し抱えることとなる。

秀吉の家臣団は尾張派と近江派に分かれ、清正など武断派と石田三成など文治派としてことごとく反目するようになる。それぞれのシンボルは正室北の政所ねねと浅井氏の次女にして側室の淀君。秀吉子飼いの武将たちにとって北政所は慈母以上の存在、大阪城を仕切る美貌の淀君は身のほどわきまえぬ妾。関ヶ原の合戦で徳川につき先鋒に立った武断派の面々の心情に、慈母ねねはどれほど影響したか。あるいは地の政所の指示があったのか。

北の政所としては豊臣存続のための苦渋の選択だったのか、それとも女の戦いは別な感情に突き動かされたか。

女の意地か夫をめぐる嫉妬か、妻か妾か。

今さら感はあるが世の女性達には頑張っていただきたい。いずれにしろ歴史は女性によって創られるのだから。

